

人物で語る 日本デンマーク

⑨

岡田庄太郎Ⅰ

岡田庄太郎は、一八八一年（明治一四年）安城村東尾で生まれた。町会議員（一五年間）や助役（四年間）を務め、後に町長も経験した。明治用水関係では、組合の議員を二十余年務め、新制度となつてから議長も経験した。農会関係では、町農会の幹事として、岡田菊次郎会長の下で町農会経営に手腕を発揮した。ここでは、町農会での活躍ぶりを見ていく。

一九二一年（大正一〇年）当時の町農会は町役場（現更生病院の場所）の一角にあった。町農会は、農業の技術指導、農家の経済状況などの各種調査、養蚕・園芸・畜産などの奨励補助などを主な業務としており、農家に通知や連絡をするだけの役所に近い存在だった。岡田庄太郎は、農会は農民の機関だから、利用されてこそ効果があるはずだと考え、これまでのように上からの通知や連絡だけのやり方を改め、もっと農民本位に利用される組織に作り変えた。具体的には安城町内十七区の

区長を町農会の支部長として、事あるごとに支部長の意見を反映するようにした。この十七人を通して、町内の二千五百戸にも及ぶ全農家と意志疎通が図られると考えたからである。このように改めてからは、それまで町農会が主催して盛り上がり欠けていた品評会や講演会なども、各区が自主的に取り組むようになった。これらの自主的な取り組みには補助金を出すことにしたので、農民の意欲はますますかき立てられることになった。

また岡田庄太郎は、多角形農業を推進した。彼の考え方は家族一人一役主義で、主人は米、夫人は鶏、息子はスイカというように分担し、三人家族には三角形農業を、五人家族には五角形農業をするように勧めた。その結果、米だけ作ってあればよかった農業から抜け出して養蚕や養鶏を導入し、さらにナシやスイカを栽培するなどして経営の多角化が図られるようになり、農家の収入が増加するようになった。ここ



▲岡田庄太郎

まで見てきたように、彼が町農会で活躍できた背景には山崎延吉の影響があった。庄太郎は、山崎ら



▲安城町農会館(右)と碧海郡農会館

が村の青年のために開いた夜学の生徒の一人であり、ここでみっちり山崎延吉イズムをたたきこまれたのである。また、さらに庄太郎は、農民が気安く出入りできる集いの場として、独立した町農会の建物を建てた（現あいち中央農協本店の場所）。自分で設計を行い、一九二七年（昭和二年）四月に、建坪百六坪、工費二万八千五百余円で竣工した。全国でも屈指の町農会館であった。なお、七年後の一九三四年（昭和九年）には、その西隣に郡農会館が建てられた。これら二つの立派な農会館が並び建つ情景は、まさしく日本デンマークとして全国にその名を知られることになる農業先進地安城の隆盛を象徴していた。

文 星野光俊